

子供の繪

——日本幼稚園協會夏期講習會講演——

菅原 教造

私の末の子供で、この幼稚園に御厄介になつた子ですが、この子供の四歳の時、即ち幼稚園に入る二年前の年から、幼稚園の二年間、その後此方の小學校に御厄介になつて四年生迄を通じて約八年間、毎日子供に繪を描いて貰つて、私はその傍で熱心にそれを調べて居りました。いや、調べると言ふよりも味つて居りました。その八年間の收穫を七割位は今日持參致しました。でこの子供の八年間の繪をお目にかけてながら、子供の繪の問題についてお話を申し上げ度いと思ひます。

これは四人目の子です。誰でも初めの子供といふは、親として非常に興味をもつて觀察みたいな事をしたり、ちやほやして總領の甚六性を親の方が子供に與へたりするものですが、四人目位になります。慣れて來ますから、ちやほやするにしても觀察なんかはしなくなりませう。私も初めの子供の繪はずつと調べたんですが、末の子のは實は放つておいたんです。處が震災の年、その子が二階から落つこちで、齒で下唇の裏に傷をつけたのです。何でもないと思つて居たんですが、さうも普通の傷と違つて變だと思ふので、家内が念のため慶應病院に連れて行つて診察して貰つたら、「水瘡といふ年寄りに子供にある致命的の病氣で、一命の保證が出来ない」と斯ういふ電話がかゝつて、來たんです。其時に生死の不明なその子供の描いた繪が其處いらにあつたんです。平素から私は、何か事件が起れば、その最悪の場合をハッキリ考へて覺悟する癖があります。今迄あまり末つ子の繪を注意しなかつたんですが、その時その繪を、「あいつも死ぬのかな」と思つて見て

居るに、その繪が恐ろしい力で親を掴まへて來ました。「おやー」を思つて見直したんです。ものを見直すといふことは、よくさう云ふ恐ろしい瞬間に起るものと見えます。見て居るに其繪は餘程不思議な繪なんです。「死ぬかも知れないんだから、せめて今迄に描いた繪を集めよう」と思ひまして、家中方々探し始めました。これが今日のお話の主題の發端なんです。切開の手術がうまく行つて、幸にその子は助かつたんですが、家では丁度上の子供が大病で寢て居る時でしたから、其子を日本橋の家の内實家へ預けました。預けて一週間目に大正十二年のあの大地震です。夜になつて二階から下町の方を見るに、一面に燃えて居るんです。「水癌でやつこ助かつて、今度は地震と火事で死ぬのかな」と思つたものでした。そう言ふわけで、この年は私にまつては記念すべき年だつたんですが、それが又子供の繪を調べる偶然な手懸りになつたわけです。

これから次の順で「子供の繪」のお話をして行きます。

(一) デジャヴ ユ ミ ジャ ヲ ヲ ヲ ヲ

(二) 繪の大道は一筋道——藝は同質

(三) 生活の焦點——心境の繪——畫面の繪

(四) 氣持で變る姿——姿に即した氣持

(五) 子供の世界と大人の世界

(六) 子供と一緒にものを見ること——繪にする見方

こゝに掲げた項目のうち、(一)から(四)までは速記を訂正したものであり、(五)(六)及び次號に出る分は、當日時間の都合で話を粗略にしたもんですから、それを補ふために、或は項目を追加したり變更したりして、新たに執筆して見たも

のです。随つて、兩方を較べるに、記事の調子が變つてゐると思ひます。

(一)始めに變てこな外國語「デジャヴ」に書いてあります。「デジャヴ」に「いふのは斯うなんです。今日只今此處で、鬚を生やした變なおぢいさんが話してるが、之は今始めて起つたことでもなく、一度かういふことがあつたやうな氣がするに皆さんがお思ひになることなんです。斯う云ふ初めて出會ふ場面は曾て今迄の生活の經驗にあつた様な氣がするに「いふ體驗なんです。たゞへば初めて訪問した初めての家の應接間の様子を見て、私は曾て此處の家に來た様な氣がすると思ふに、又初めての景色を見て一遍見た様な氣がするに「いふ氣持を、「デジャヴ」に云ふんです。「既に見たもの」に「いふ意味のフランス語です。初めて見たに拘らず、見覚えのある、いふこの氣持は、皆さん誰方でも御經驗がある事と思ひます。兼好法師も「徒然草」の第七十一段で——「如何なる折ぞ、只今、人の言ふ事も、目に見ゆるものも、吾が心の中も、かゝる事の、何時ぞやありしに覺えて、何時に思ひ出でねど、まさしくありし心地のするは、吾ばかりかく思ふにや」に、この氣持を述べて居ります。

もう一つの方の「ジャメヴ」は、曾て見た事の無い、に云ふ氣持です。毎日通つて居る學校の廊下を歩いて、「オヤ、この廊下は初めて通つた様な氣がする、ふだんに一寸調子が違ふ」に云ふ様な、物珍しさ、新しさ、さう云ふ氣持が起る事があります。私は一週間に二遍や三遍はさう云ふ氣持がするに「いふことがあります。たゞへば自分の應接間や、自分の書齋に入つて行つて一寸變つて居るなと思つて見直す氣持が起ります。之は景色や住居ばかりではありません、人に對してもやはりさういふ氣持が起ります。つまりフレッシュな氣持に言ひますか、平常ならば目立たない平凡なものであるに拘らず、或場合の或人に限つてそれがふだんにまるで違つた生き／＼した調子を帯びて來る様に感ぜられる。さう云ふ氣持を

「ジャメヴェ」を申します。前に述べたのは、初めて出會^{でつくや}して居乍ら覺えのある云ふ氣持、今度のは見慣れたものでありながら、初めて出會つたやうな氣持です。丁度正反對のものなんです。同じ仕事を何年も何年もして居ます、慣れて来て刺戟がなくなるを申しますが、一寸自分その事件が慣つこになつて、刺戟がなくなつて、興味がなくなつて、新しみがなくなつて云ふ風に、私達の生活といふものは倦^あきくしてしまつて單調になり勝ちのものです。そこでその單調を破つて生きくした氣持を私達に與へて呉れたら云ふ事は誰れでも要求して居る處でせうと思ひます。夫婦の間でも、兄弟の間でも、友達の間でも、親子の間でも、師弟の間でも何事でもさうですが、其處に其時々^{時々}の生活の新しみ云ふものが湧き出なければ、實際一緒に暮して行けるものじゃないんです。即ち人生には「ジャメヴェ」が常に要求されてるんです。繪を描く人とか、音樂を作曲する人とか云ふ様な藝術家は、吾々から見て平凡だと思はれる様な物事に關して不思議な魅力を感じる人なのです。つまり永久にものが新しく見える人なんです。發明家なん云ふ人の氣持は結局さう云ふ風に考へながらものを見て居る人だと言つていゝでせう。さういふ風な「ジャメヴェ」の氣持といふものは、私達の生活に非常に大切であると思ひます。

此處に置いてある卓上の水指しミコップ——これは斯う云ふ竝べ方にして置いてあるんですけれども、一寸置き方をずらして見るに生きて來るでせう。その置き方距離の關係一つで、氣持が違つて來て、ぐつミ味が出て來ます。何でもない事の様ですが、竝べ方の幾つかの場面が其人にツ……出て來て、その中で一番いゝものを選まれるんです。さうかするに当たつてやつてゐるうちに偶然に旨く行つたな云ふ場合もありますが、それでは未だ足りないんです。一々ピタリミツボに嵌まらなければいけないんです。一度で勝負がつくやうにならなければいけないんです。平凡な儘のものを見て居乍ら、新しみを自分の氣持で造り出すのです。

これはものを見て居る氣持についてのお話ですが、人間同志の氣持ミいふものは實際それなんです。或問題を自分が提供する。その提供する仕方は相手を生かす様にするミ共に自分も生きる様に提供する。さうするミ其人間同志の間柄が永遠に新しいんです。其處の處……無論自分を殺さなければいけません。そして向ふの悪い處の出ない様に、いゝ處の出る様に、導かなければならない。之は苦勞人でなければ出来ない事かも知れませんが、其處の處がかなり大事な問題なんです。まあ私もこれで五十ミ六十の間になつて居りますが、段々ミ自分を殺すやうになつて來ましたけれども、家の者が失敗するミ「だから言はないミこぢやないぢやないか」なんミ嘸鳴りつけた時代が長く續きました。この何年かは「それは豫めさう云ふ事を言はなかつたから無理はない。責任はこつちにある、よし〜」ミいふ様になつて來ました。つまりそれが今申し上げた様な人間生活全體に通ずる一つの見方ぢやないかミ思ふんです。自分も生き人も生きて其結果、あつたかい氣持が流れる。景色を見るにしても、靜物を見るにしても、凡て其處が肝腎な處で、最も拙い位置に居て、最も拙い見方をして「之はまついや、つまらないや」ミか、「來て見ればそれ程でなし」ミ云ふ様な考へ方もありますけれども、さういふのは、見る方の恥でなければならぬミ思ふんです。

(二) まあこんな長々しい前置を致しまして、それから子供の繪の話に這入ります。御覽の通り、「繪の大道は一筋道——藝は同質」ミ云ふ題を掲げてあります。之は實は繪ミ言つても人間ミ言つてもいゝんです。人間の代りに人間仲間即ち社會ミ言つたつていゝんです。凡て繪ミ云ふものは、幼稚園で子供の描く繪でも、小學校でも、中等學校でも、専門の美術學校でも、要するに繪の大道は一筋道であり、これをもつミ大きく言ひ現せば、凡て藝ミ云ふものは同質のものだミいふ事を根本に考へなければなりません。それですから小さい子供の描く繪も、専門の大家がそれを見て「あゝ面白い」ミ感心

するた、ちの見方が大切なんです。教育者の根本の缺點は、幼稚園時代だから斯う云ふ風にしか見ないことなんです。同時に小學校だから斯う、中等學校だから斯う、繪の大道を言はないで（これは實は繪の本筋の道が解らないからなんです）、一段々々に段階的にものを見る悪い癖がついてゐる事なんです。たゞへば子供の知的生活が、個別的から一般的に、直觀的から概念的に、内容的から形式的に、具體的から抽象的に、もつゝ解り易く言へば簡單から複雑へ、碎いて言へば馬鹿から伶俐へ發達するものさきめてかゝつてゐる事なんです。そしてその發達の法則をやらをすぐ繪に押しつけようとしてゐる事なんです。つまり今日の教育學界は、生物と人間の氣持・人間の文化とを、こつちやにして、まだ／＼生物進化論の亡靈に取りつかれてゐるらしいんです。又教育者の缺點は、さうかするに、この繪は教育的の繪だから、専門家の見方で見られては困る、と言つたりして、繪の大道を歩まないで、わざ／＼子供の繪に差別待遇をつけて貰ひたがつてゐたりすることなんです。いづれにしてもかういふ考へ方は、根こそぎに間違つてゐる譯なんです。

生物進化論の亡靈に取りつかれてある時代遅れの教育者は、人間の文化を批判する場合にも、簡單なものは未發達なものであり、複雑なものは發達したものである、無條件に信じてゐるらしいんです。所が文化、藝術、殊に繪の世界になりますと、發達は美的統一のあると言ふ事、藝術的の價値のあると言ふ事であり、未發達はその統一のない、藝術的の價値の少ないと言ふ事なんです。こゝん所が生物と藝術とで根本的に違ふ所なんです。

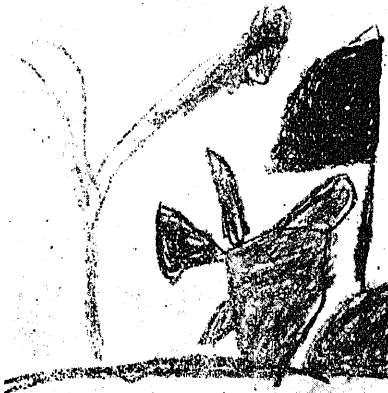
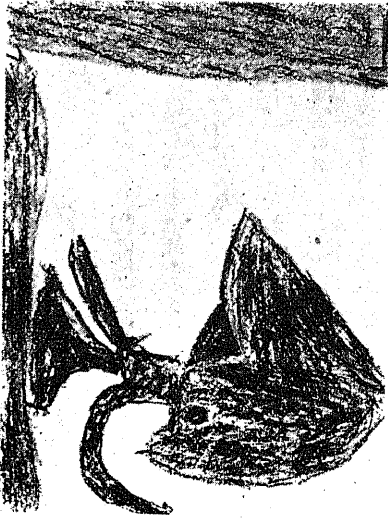
それですから、繪としての初心の・無邪氣な・素直な描現は、その細工をしない・手のこまない所に、却つて單一から來る特殊の價値を示すことが少なくないんです。この場合には、簡單なものが複雑なものよりも、高次の統一を示す事になるでせう。あまりこま／＼に分化しない、單純な、大まかな、荒削りな、原始的なものは、一氣に統一に向つて迫つて來る力強い表現を與へます。つまり細かい分節を消化し切つたと言ふか、細かい分化を通り抜けたと言ふか、こまかくも分節

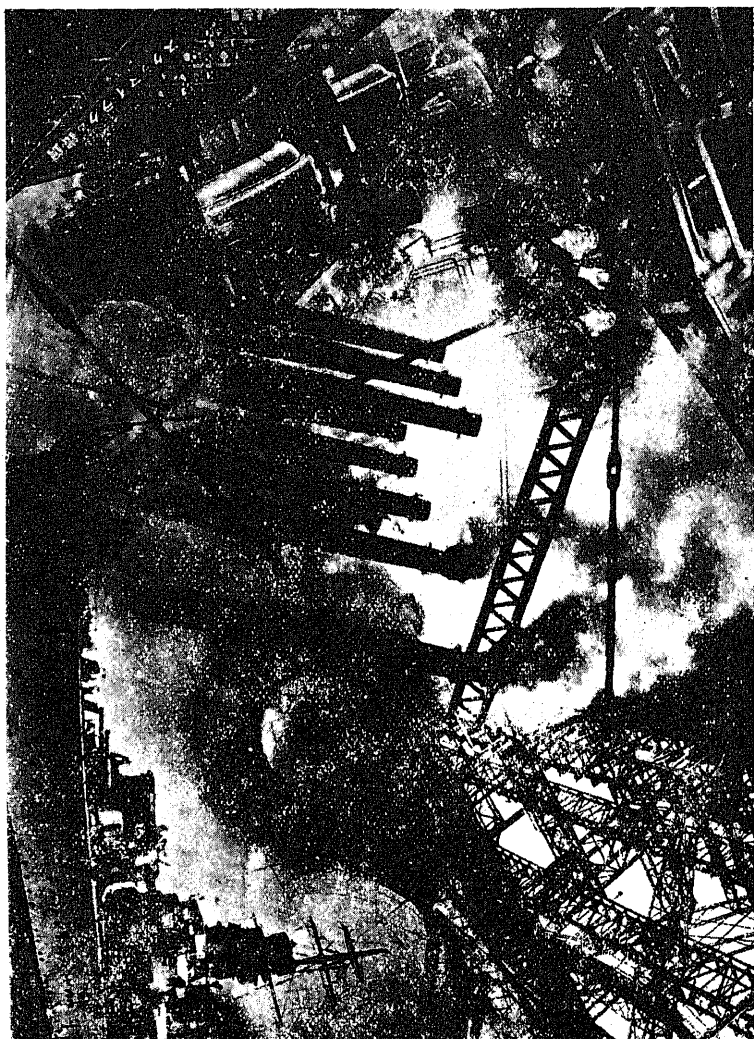
分化の名残を留めないほごに、單純を以つて統一された全體の味があるんです。實は日本人は一番この味のわかる國民なんです。

生物ならば、複雑な個體は簡單な細胞よりも發達したものと云ふ事が出来るでせう。随つて個體としての子供は個體としての大人に較べて、未發達であると言つてもいいでせう。しかし、それだから言つて、子供の描いた繪であるが故に、その價值が未發達であると言ふ事は出来ません。又單純な田園の文化は、複雑な都會の文化に較べて、未發達であると言へるでせう。しかし、それだから言つて、今日田園に残つてゐる——何百年前の單純な文化が産んだ製作の傳統をそのまま、承け繼いでゐる——民藝の作品、所謂下手物げものの價值が未發達であるとは言はれません。生物個體や文化制度の高低又は發達・未發達の問題は、その個體や文化が産出した藝術價值の高低又は發達・未發達の問題は、並行してゐるものではないんです。

それですから、子供の生活だから言つて、割増をしたり或は割引をしたりしなくつてもいいんです。子供のして居る事、言つて居る事も、矢張人間の大道の理はれたものなんですから、それを人間の大きな道から見てやるのが當然です。こゝまでは誰にでもわかつてゐて、繪の問題になることの根本の考へを捨てたがるのはさういふ理由なのか、私にはそれがわかりません。繪の方だつて、やはり同じ事なんです。高所から即ち大きい繪の道から見て、一層子供の繪の價值が解つて来ることは私は思ひます。書物だけの勉強をした児童心理學者や、テスト専門の學者などは、智能の發達がこの程度だからかういふ繪が描かれるのだなきゝ平氣で批判してゐますけれど、其子供——子供は文句を言ふだけの口を持つて居るから黙つて居るんですが——は随分迷惑の事であると思ひます。

私はその四つの子供の描いた繪に、生死不明の時にピンと打たれた氣持が其處にあるんです。こゝに挿繪として掲げた





その繪は、縦にも見られるし、横にも見られるし、逆さまにも見られる。天地さか左右さか云ふ事を無視した荒つばい面白い繪で、色も相當面白く使つてあります。所で面白い事にはこの構圖は現代の寫眞にそっくり出てゐる事なんです。ここに掲げたのは鋼鐵の文化を示す寫眞印畫です。繪についての人類の根本的の考へ方の一つの現はれが、兩方に共通して示されてあるではありませんか。こゝをよく見て、よく考へて頂きたいんです。有り來りの、見慣れた繪で教養された一般人、殊に學校で圖畫教育の稽古を受けた人には、こゝがわからないんです。

地の上に幹が一本スックミ生えてゐます。この幹の太い強い生命がそのまゝ發展して行つたなら、人間の問題も繪の問題も、なんにも心配はないんです。幹には追々に枝が生へ、枝には葉が茂ります。しかし「自然」は決して幹ミ枝ミを取り違へるやうなことを致しません。子供が追々に成長して、小學校に入り中等學校に入るミ、教育殊に圖畫教育のやり方は、この幹の大きい味——繪の大道——を全く知りませんから、こま／＼した枝葉の事ばかりを教へて下さるんです。幹の生命、繪の大道を知らない人の據り所は、まあ圖畫の手本ださか、古臭い圖案法ださか、器械的な用器畫法ださか、やたらに影をつける事ださか、お定まりの餘色の配合ださか、自分の先生の流儀の描法ださか、ざつここんなもんでせう。太い幹を生かしながら枝葉を茂らせて下さればいゝんですが、こんな取るに足らない枝葉の規則を強制して、「至道無爲」もいふべき大切な幹——繪の大道を枯らすこゝばかりをして下さるんです。

子供が描いて居るものゝ中に何があるかを、繪の大道の上から見た批判——藝は同質のものであるといふ批判——を下す事が出来なければ、實は子供の繪を批判する資格がない譯なんです。その資格を得るためには、實は子供の繪を批判する人も、子供の繪を指導する人も、理想から言へば、一ミ通り人類の藝術、即ち古今東西の藝術に通じてゐる賞はなければならぬんです。しかしそんな事は望んでも到底達せられない願ひです。そこで、その近道ミして或はその代表的の方

法として、是非とも何か一藝に通じてゐて貰ひたいんです。これだけの事はさうしても必要なんです。「一は多を攝す」で、何か一藝に通じてゐれば、つまり通ずる言ふ事は、死に身になつて修業する言ふ事なんですから、他のいろ／＼の藝の味も解つて来るものなんです。

「ねえ、先生」云ふ子供の言葉の音色ミか上げ下げミか表現ミか氣持ミかには、實に豊富な味があるでせう。子供ミ云ふけれども大人も及ばない程のものが其處に溢れて居るんです。つい吾々は忙しさにかまけてその味を汲み取らずにしまひがちなのですが、其の忙かしい處を知つてか知らずか、恐らくは知らずでせう、それでしがみついて来る子供の氣持ミいふものは、人間生活のかなり奥深い處迄突^つ込んで來て居るのを、此方が忙しくて受けられない、つまり吾々が阿呆で汲み取れない事が多いんです。こつちも無心になつて、ふんわりミその大きい味をそのまゝ素直に受け容れたら、それでいいんです。

繪にしても同じ事なんですが、大人には悪い癖がついて、素直でなくなつてゐるために、その子供の繪の大きい味が解らないんです。それですから、この悪い癖を除くためには、さうしても一ミ通りの修業がいります。しかもこの修業も初めはさうしても大人本位の修業から出發しなければなりません。たゞへ自分は繪を描けないにしても、見るだけはいろいろのものを見なければなりません。或は繪を描く偉い人に會つて、話を聞いて見なければなりません。實際それだけの準備が必要なんです。その準備なしには、決して子供の繪はわかりません。先刻^{まづ}申上げた「ジャメヅ」の不思議な味も其處から出て來る譯なんです。子供の繪を論ずる學者は無調法者で、この繪の大道を知らないものですから、それ／＼勝手に段階を區切つて「斯う云ふ年の子供は斯う描く、結局智慧が足りないから」ミ、かうです。つまり藝は同質ミいふことを知らないために、こんな氣の毒な斷定を下して居る譯なんです。子供の氣持ミ云ふものは、人間の大道に即して居る大きな

氣持なんですが、教育の畑にある人程、發達ミか段階ミかいふ小事を考へるためにそれが解らないんです。之は生物進化論全盛時代の古臭い教育關係の學問なんか、實に人間的の洞察が足りない爲に、何時の間にかそんな下らない考へ方を教育界に普及させ、今度教育界がそれを家庭に持ち込んだり、社會にひろめたりするものですから、さうにもかうにもならない所まで来てしまつたのだ。私は常に考へて居ります。要するに藝は同質のものであり、繪の大道は一筋道なんですから、子供の遊戯にしても、表情にしても、繪にしても、人間の大道に即した眼で見ても、初めて眞の味ミ云ふものが揃めるのだと思ひます。

(三)これから「生活の焦點——心境の繪——畫面の繪」ミ云ふ話に移ります。皆さんの中で、夏水泳であつ、ぶあつ、ぶして溺れさうになつた経験がありませんか。或は二階や屋根から落つこちた経験がありませんか。こんな事はないほうがいいんですが、私は二階から二三遍落つこつてよく知つて居ますが、その瞬間の氣持は、「もうお了ひだ。もう死ぬな」ミ思ふと共に、其人が二十歳ならば一遍に二十年の生活が眼の前を通り過ぎます。それがほんの何秒ミいふ短時間の間に二十年或は三十年の豊富な場面がキューッミ壓縮されてパツミ火花が散る様に浮んで來るんです。例へば十二卷の活動寫眞、それをぐるぐるミ一瞬に廻して見た氣持です。この理窟に合はないやうな事實が實際に起るミ云ふ事は、實に之は不思議なんです。これだけ大勢のお集りの中には、それに近い御経験を持つた方もおありだらうと思ひます。さういふ物凄い一瞬間、それが生活の焦點です。モツァルトなミは五十分かゝつて演奏するシンフォニーをパツミ全部一瞬に思ひ起す事が出來たさうです。「そんな事はあるものか」ミ思ふかも知れませんが、前に述べたやうな危急存亡の場合でなくとも、人によつてはさう云ふ事が出來るんです。それですから私達の長い一生涯ミ云ふものも、考へ方によつて一瞬に把握する事が

出来るんです。これは理窟にならないやうな事實なんです。船の水夫さんがマストの頂上で仕事をして居る。船がツツツ走つて居る。一寸足を滑らせて、アツツ思ふ間に落つこつちまふ。その水面に落ちるまでのホンの何秒かの間に、一生の生活場面がグル／＼廻つて出て来るなんて話も傳つて居ります。扱てさう云ふ人間の一生を焦點として一瞬に握りつめた物凄氣勢を書けと言はれたつて、私達にはそれは却て書けないんです、そんな事は何うしても出来ない。文にも書けないし、繪にも描けないんですが、兎も角もさう云ふ事實がある以上には、それが人間に出来る譯なんです。

其處でこの事實から、心境の繪云ふお話を引出して来る譯なんです。筆をきつて紙の上に描く繪を、畫面の繪云ふものに對して、まだ「畫面の繪」にならずに氣持で躍動して居る繪を「心境の繪」申します。この心境の繪云ふものを、繪を描く事が出来ない素人さんはかなり持つて居るんです。言ふまでもなく繪を描ける人は、尙更鮮やかにそれを持つて居るんです。しかし子供であるさ、その心境の繪云ふものゝ躍動が實に豊富なんです。たゞせば十二巻のフィルムを一點に壓縮したやうにして、心境の繪を握りしめて、それを發展させるんです。さうしてその一部が畫面の繪になつて現れて来るんです。それですから、その畫面は大人から見ると、大人の眼に見えるだけの畫面に過ぎないんですけれど、子供にきつてはその畫面の繪の、上云ふか、蔭云ふか、外云ふか、底云ふか、其處から一面に心境の繪が豊富に多方面に動いて躍動して居るんです。躍動してゐるさいふ事は、心境の繪で自由自在に畫面の繪を變化して、それを眺めてゐるさいふ事なんです。

展覽會なんかで御覧になる繪だつて、なか／＼一遍や二遍で出来たものではないんです。スケッチをしたり、組立てたり、書直したり、塗潰したり、色々苦勞があるんですが、出来上つた作品には、一切そのやうなもの見えません。恐ら

くはその苦勞の一割でも作品になつて現れたら、その畫家は満足するでせう。文學者にしてもさうで、豊富な經驗を土臺にして作品に造るのですけれども、やはりその努力の一割でも作品に現れたら満足するでせう。「書いて見りやあそれだけの事じやないか」、なるほぎそれだけの事しか此處に書いてない。しかしそれだけの事を書くために、その何十倍のものを書いて、それを無駄にしてゐるんです。繪にしても彫刻にしても音楽にしても文學にしても科學にしても、發表する迄の努力や苦心云ふものは、それはく並大抵なものではない譯なんです。大人の作家はまあさう云ふ辯明をする場合もあるさうものですが、偉い作家は決してそれをしません。作家が自分の作品に對して辯明するのは實に拙い話なんで、自分の氣持の一割しか出て居ないなご云ふことは決して申しません。作家ばかりではありません、恥を知る人はさういふことを決して致しません。世間でそれを、なんのかんの批評したり、貶したりするのは、さうも仕方がない、させて置くよりしようがない。證據が一割なら一割しか出てゐないんですから、蔭の努力を世間に認めて貰はうご致しません。かういふ畫面に見えない蔭の畫さういふやうなものは、繪のわかる人にしかわかりません。

これだけの事を申し上げたら、子供の繪の話がし易くなつて來ます。子供にしたつて、思ふここの一割位しか出てゐないんです。子供の繪はつまり其處んごころが面白いで、一割も無論出て居ないし、しかもそれが大人から見ても變てこに出て居るんです。大人から見ても變てこに出て居るんですけれども、子供はそれを見てゐながら畫面を自由自在に變化して居るんです。つまり子供の繪には、何處まで行つても仕上げさういふものが無いんです。畫面の繪を心境の繪で見ても——之が吾々に解らない不可思議な處なんです。棒が一本其處に描いてあるんですけれども、子供にまつてはそれが、縦に動いて來たり、延びたり、右に左に動いたり、震動したり、躍動したり、自分の心境の繪で、畫面の繪を組立て、ちやんご拵へて居るんです。其處が子供の繪の生命なんですけれども、悲しいこごには、大人は馬鹿で、その氣持が解らない

んです。作品の一割だけしか出てゐないのにそれを批評するさいふ先刻さつごの話一寸似てゐるんですけれども、子供の生活に於ては、その一割をも心境の繪で自由自在に變化して見てゐるんです。併しそれをさう大人に——つまり大人が足りないもんですから——説明することも出来ない譯なんです。此處に大人の世界と子供の世界と喰違つて來る原因があるんです。

今迄の教育説では——直觀的のもの具體的のもの個別的のものは子供によく解るけれども、概念的のもの抽象的のもの一般的のものは解らない、子供の知的生活は具體から抽象、直觀から概念へ移つて行く、そしてだんく大人の生生活へ近づいて行く、教へる方もその心算で進んで行かなければならない——さいふ風に説いて居りますし、世間でもそれを信じて居ります。しかしそんな事は實はあべこべなんです。言葉を覚えかけた位の年頃の小さい子供は、馬を見ても「ワンワン、牛を見ても「ワンく」、犬を見ても「ワンく」云ふ。大人はそれを聞いて、「あゝこの子供は足りないな」云ふ。これは實は大人の方が足りないんです。その場合の子供の「ワンく」云ふのは、四ツの足の獸云ふ一般的概念を意味して居るんです。決して犬云ふ個物、牛云ふ特殊の獸を意味して居るんじゃないんです。子供は直觀と共に概念し、子供は具象と共に抽象してゐるんです。頭から大人が阿呆で子供の氣持がわからないものですから、子供は「ワンく」云へば、それは犬云ふ種類の獸を意味してゐるのだミス誤解して居るんです。子供には又このやうな大人の馬鹿さ加減が解らないし、解つたにしても、さうも説明する事も、辯明する事も出来ないんで、「あの子供は足りない」云い汚名を着て黙つて居るんです。私は辯護人がついて居ないで随分子供が迷惑する事が多いだらうとつくづく思ひます。

枝葉でなしに、生活の幹を直覺する事の出来る大人には、子供の言葉を聞かなくとも、子供の表情や運動で、十分にそれが掴めるんです。しかしそのためには、自分自身が多年貯蓄した枝葉を全部振り捨てなければならぬんです。そこが

むづかしい所なんです。さういふ譯ですから、子供が何を考へて居るかを知らる爲めには、大人は餘程の努力をしなければならぬのに、努力をする代りに、自分達の勝手な言ひ方をしたり、それを貶したりするんですから、滅茶苦茶です。繪もそれと同じです。つまり畫面の繪だけしか大人に解らないけれども、子供には心境の繪云ふものが畫面の繪に被さつて動いて居る。だから絶えずそのこの畫面の繪に就て子供が何を考へて居るかさういふ事を旨く探り出して、その畫面の繪の上に心境の繪をつけて行かなければならない。之が實に難しい仕事だ、言はなければならぬんです。

(四)次に「氣持で變る姿——姿に即した氣持」さういふお話に移ります。こゝにある一つの水さしでも、今見た氣持さ其次に見た氣持さで、その姿が變るんです。大抵大人はこのガラスならガラスの物理的性質なんか考へて居りません。處が子供になるさ、之が瓢箪にもなるし、雪達磨にもなるし、兎さんにもなるし、猫にもなるし、お父さんが胡坐かいて居る處にもなるし、實に奇々妙々なんです。その時その時の氣持で、姿がいろ／＼に變るんです。さうして又、一々その變つた姿に即した氣持が躍動するんです。

水さしの形にしても、頸の所さ胸の所さが、何分の一さ何分の一の比になつて居るさ云ふ様な問題で、大人は之を眺めたり、水の出方を物理的の立場から考へたりします。つまり、大人が學校や社會で勉強した知識さ云ふものでそれを解釋して、自分達の子供の時の氣持を全く忘れて居るんです。一般の大人の氣持さいふものは、生れてすぐ今の大人になつた氣持、生れてすぐ今のお婆さんになつた氣持で居るんです。其處んところは實に淺ましいさ言へば淺ましいものなんです。それは謂はゞ大人の運命さもいふべきもので、仕様がな所なせうね。その爲めに、子供や若い者はみんなにひさい目に會つてゐるか、知れたもんじゃありません。吾々が授けられた知識さか教育さか言ふものによつて、若い時に持

つて居た生活の大道の味をすっかり拭ひ去られてしまふんです。親になるミ、自分の若い時の氣持を忘れて、子供に形式的な説教をします。「俺だつて覺えがある。尤もだ。けれども此處を一つ考へて呉れないか」云ふ親は少ないやうです。そんなミをしたミもないやうな顔をして、「俺は自分でそんなミをした覺えがないから、お前に向つてそれを言ふ資格がある」なんて、全くあやしいもんです。

水さしがいろ／＼のものに變るミいつても、大人が手品を見てゐるやうに、向うにある水さしのその時々々の姿の變り方を、此方が冷靜に見てゐるのではありません。此方の氣持が、その變つて行く一々の姿に調子を合せて、躍動してゐるんです。これが「氣持で變る姿——姿に即した氣持」ミいふミなんです。そしてこの變化のある豊富な境地から、子供の繪が生れるんです。それですから、子供が何かを描く態度は、全く大人ミ違ひます。一般の大人はその何かを描く時に、寫眞のレンズのやうな態度でそれを眺めてゐます。一定の距離、一定の位置、釘づけにされたやうな世界です。そしてそれから來る一定の畫面、これは死のやうな世界です。その畫面を組立てる一定の遠近、一定の大小、一定の明暗、一定の配色、問題は全體に於てそれだけです。これで萬事OKです。誰でも「なーんだ」ミ言ひたくなくてせう。

子供が人形なら人形を描く時には、前後左右上下から眺めたり、觸つたり抱つこをしたり、起したり寝かせたり、歩かせたり座らせたりします。つまり人形ミ一緒に生活します。そして、その充ち／＼た溢れるばかりの姿、その姿に即した充ち／＼た溢れるばかりの氣持を繪にするんです。そこには、畫面の繪ミ共に、群がり湧く澤山の心境の繪を含んでゐるんです。それですから、この繪は直觀的な個物的な畫像であるミ共に、高級な概念的の表現でもあるんです。一般の大人に子供の繪の解りにくい理由もこゝにあるんですが、一般の畫家が子供の繪のやうな面白い繪を描けない理由もこゝにあるんです。幸な事には、いくら大人になつても、偉大な作家になるミ、歳をこらせずに、この恵まれた氣持をなくしないで

るんです。しかも面白い事には、この意味の永遠に若い偉大な作家は、畫家よりも却つて作曲家に多いんです。

永遠の若さを持たない先生方は、自分の氣持が段々固くなつて居るのを知らないで、自分の經驗自分の知識を子供に押し賣りしようとするんです。實際に圖畫の専門の先生になるミ、大きい幹の方を捨て、しまつて、大抵その枝葉の方だけを拾ひ集めてゐるんですから、そしてそれを好い事だと思つてゐるんですから、一番罪が深いんです。「知らずにやつてゐるんだから」では許せません。その「知らずに」を責めなければならぬ、責めてそれを知らさなければならぬんです。

(五)次は「子供の世界と大人の世界」といふ題です。畫生活を中心として、子供の世界と大人の世界とを比較して、代る代るお話しして見ようと思ひます。先づ子供の世界から始めます。

子供が自分の描いた繪を見てゐるミ、その一つの畫面の繪を取り圍んで、澤山の心境の繪が躍動してゐる事は、右に述べた通りなんですが、こゝで皆さんも一つ子供の氣持になつて、繪を描く時の瞬間——子供が筆を執つて白紙に向つた氣持を考へて見て頂きたいんです。子供が何かを描かうミして白紙にぶつかると時には、溢れるほどの心境の繪が、その白紙の上に入り亂れて動いてゐます。もうこれは皆さんが樂に御想像の出來る事ですから、改めて精しく申し上げるまでもありません。次に大人の世界です。

筆を握つて白紙に向つた場合に、組み立てられたり、解きほぎされたり、ましまつたり、變つたりする心境の繪の中から、さういふ動きのされない一つの場面を選び出してそれを畫面の繪にするか、大人に取つてはこれは眞に物凄い瞬間でなければなりません。畫家が最初の一點を白紙に落した刹那は、もう畫面全體の組織を完了した時なんです。ハッキリした見透しがついた時なんです。ひきたび動員令を發したといふ事は、百萬の將兵が必勝の戰を始める事なんですから、こ

の號令は、途中で斷じて組織の破綻を來さないやうに、刻々の變化に應じて全體をまきめて行く張り切つた氣持の、初めでもあり中途でもあり、又終結でもあるんです。つまり十二卷のフィルムが一點に凝集した氣持なんです。それですから、大人の世界では、實現さるべきたつた一つの生活場面があるつ切りです。ものごとのあらゆる成否は、實にこの一點に懸つてゐるんです。この眞の生活の味は、實に劍の刃を渡るやうなもので、のるかそるか、いちかばちか、名を遺すか恥を遺すか、生きるか死ぬか、問題はたゞそれだけなんです。次に子供の方に移ります。

子供の世界には、大人から見た實現のたつた一つの場面に即して、この實現場面の價値に等しい可能場面が澤山あるんです。即ち畫面の繪はたつた一つある切りなんですけれども、澤山の心境の繪で、その畫面の繪を、さし／＼再構成してゐるんです。この點に於て、大人は切り詰つた一つの世界にしか住む事が出来ませんけれども、子供はのんびりさいくつもの世界に住むことが出来る言つていゝでせう。それですから子供は、大人の右に述べたやうな切羽詰つた氣持の論理では、さうしても解釋するこゝの出来ない朗かな生活をしてゐる譯なんです。次はまた大人の世界です。

一般の大人は「知覺の世界」——繪の場合で言へば「見たもの」即ち「實物」又は「モデル」ミ、それによつて描いた「畫面」ミを、別々の二つの世界ミして考へたがります。西洋流の畫家は、昔からこの病に取りつかれてゐるために、東洋流の畫家ミ較べて、ミの位その繪の格を落してゐるか解りません。一般の大人はこのやうに別々の世界にしたまゝでゐますけれども、畫家はこの二つを一つのものにしやうとします。しかしその一つにする仕方が、東洋流ミ西洋流ミで違ふんです。西洋流の畫家は一般に、モデルの方を主にして、繪の方をそれに合せようとして苦心します。しかし實はこれは大變な間違ひなんです。モデル即ち實物が先きにあつて、實物の寫眞見たやうな繪が後で出来るんじやないんです。繪の大道の本筋を言へば、モデルを手懸りミして、ほんの手懸りミして先づ心境の繪が生れるんです。そしてこの心境の繪を畫面の繪に

仕上げるんです。繪の道さいふものは、たゞそれだけのこゝまなんです。それですから、モデルがモデルさして向うに見えるのでなくつて、心境の繪がモデルに被ひかぶさつてゐるんです。つまりモデルにつれて心境の繪が、向うに浮き上つて見えてゐる譯なんです。それですから、心境の繪を抜きにしたモデルさいふやうなこゝまは、結局ゼロさいふこゝまになる譯であり、美的なものを見ないさいふこゝまなんです。要するに「モデル」さ「畫面の繪」さ「二つの世界があるのではなくつて、随つて「畫面の繪」をモデルに一致させるこゝまが必要なのではなくつて、「仕上げられた心境の繪」即ち「畫面の繪」がたゞ一つあるつ切りなんです。つまり實現の生活場面が、たつた一つあるつ切りなんです。そして「心境の繪」さ「モデル」さこの關係はさうか言ひますさ、これは實に微妙な不即不離の關係にあるんで、言葉でなか／＼うまく言ひ盡せません。右に「被ひかぶさる」こゝま、つれて向うに浮き上る」こゝま申しましたが、この呼吸がうまく呑み込めたら、まあ一人前さ言つていゝでせう。これが、ものが吾々に美しく見えるか見えないかを決定する際さい祕密點なんです。次は子供の世界です。

子供は一方に於て、前に述べたやうに、出來上つた畫面の繪を、自分の持つ心境の繪によつて自由に變化して、それを見て楽しんでゐるのみならず、他方に於て、モデルをも心境の繪によつて自由に變化して楽しんでゐるんです。つまり一つの實現場面の價値に等しい幾つもの可能場面を持つてゐるんです。今、畫生活——特に「モデル」さ「心境の繪」さ「畫面の繪」さこの相互關係——について、西洋流の畫家さ東洋流の畫家さ子供さを較べて見たら、大體次のやうになるでせう。西洋流の畫家は、モデルに即した心境の繪を仲介にして、畫面の繪をモデルに従屬させる傾きがあります。東洋流の畫家は、モデルに不即不離の關係にある心境の繪を仲介にして、モデルを畫面の繪に従屬させる傾きがあります。子供は變化自在な心境の繪を中心にして、モデルをも畫面の繪をも心境の繪に従屬させる傾きがあります。

(二六)次に「子供と一緒にもものを見ること——繪にする見方」を言ふ事を申します。

モデルといふものを、繪の大道から考へますと、心境の繪が「世間が考へてゐるモデル」に被ひかぶさることであること、又「世間で考へてゐるモデル」につれて、心境の繪が向うに浮き上ることであることも申しました。これを言ひ換へれば、モデルと心境の繪との關係は、不即不離の微妙な關係にあるといふことになります。そして、これが美は何ぞやといふ問題の一つの解答であることも申しました。

しかし、「美的の見方」か「趣味的な見方」かといひますと、何もなく受け身の……私達がたゞジツとしてゐるものを受け容れる態度にさらされる嫌ひがあります。それですから、これを「生きた見方」を言ひ直した方が却つていゝかも知れません。或はこれを、働きかけの態度で美を作り出すといふ意味で、「藝術的の見方」を言つた方が一層いゝかとも思ひます。一番わかり易く一番積極的に言へば、「繪にする見方」でせう。この繪にする見方の氣持が、前に度々お話しした「心境の繪」のいふことなんです。天象や景色を見るにしても、植物や動物を見るにしても、人物や風俗なきの人間生活を見るにしても、土木橋梁の築造や建築物や機械的文化を見るにしても、室内裝飾や器物や靜物の類を見るにしても、この生きた見方、藝術的な見方、繪にする見方をしなければ、それは決して人間的に統一的なものを見てゐるのではありません。何と云へば、右に述べたやうに、「世間で考へてゐるモデル」は結局ゼロといふことなんですから、さういふ見方はつまりゼロを見てゐること、即ち何も見てゐないといふことになる譯なんです。

子供と一緒で暮す——一緒に暮すと言ふよりも、一緒に生きると言つた方が尙いゝでせう——と言ふことは、親として、教師として、社會人として、人間として大切な事であるのは、これは誰にでも解り切つたことです。それはつまり人間の大道に、人類の本筋の道に立ち返ることと言ふことなんですから、今更そんな事を言ひ出したら、「おいおい氣は確かなのか」

き、却つて世間の人に笑はれませう。しかし、子供と一緒にものを見る言ふここの大切さは、案外世間の人に考へられてゐないやうです。所が子供と一緒にものを見る言ふここのは、實は子供と一緒に生きる言ふ事の心棒なんです、中軸なんです。子供と一緒に、生きたものゝ見方、藝術的のものゝ見方、繪にするものゝ見方をするここの出来る人があつたなら、その人は眞に救はれた人でせう。いや救はれる必要なぎのない人でせう。いやみのない、もつたぶらない、自惚れない、知識や經驗を賣り物にしない、正直な、素朴な、謙遜な、朗らかな——いや、そんなこを全く意識さへもしない人、即ち「無意識人」でせう。しかもその人は、聰明や教智や熱情や敏感や洗練や意力なを乗り越した「向うの人」でせう。いくつもの人一倍強烈な力がうまく平均した「虚無の一點に立つ人」でせう。

しかし、實はかういふ人でなければ、子供の繪を味ふこも、子供の繪の教育をするこも出来ない譯なんです。たごへさういふ人に成り切るこはむづかしいにしても、ほんの一瞬間でも、さういふ氣持になれたら、もうしめたものです。これが人間更生の機縁となつて、今までのものゝ見方が、すっかり變つて來るでせう。

さて、この機縁の掴み方ですが、最初は何言つても、やはり親の愛や先生の愛が、一番入りやすい道でせう。親や先生言つても實は條件がありまして、少くも繪の大道の解る人でなければなりません。それですから、この問題の要點を一言で言つてのければ、「親や先生の愛を以つて、繪の大道を子供と一緒に歩む」言ふ事になるんです。こゝまでは、そんなにむづかしい事ではありませんが、實はその奥に、もつと偉い道があるんです。しかも今度は實にむづかしい道なんです。これを一言で言つてしまへば、「一旦人間を離れて、その離れた刹那に、ものを掴む」言ふ事です。これは最後の節で述べるとして、次に親や先生の愛を以つて繪の大道を子供と一緒に歩むお話をして見ませう。

子供と一緒に繪の大道を歩む言ふ事は、子供の氣持になつて、心境の繪を「所謂モデル」に被ひかぶせるこ、又は繪

にするやうにもを見ることです。一般の言葉で言へば、子供と一緒になつて美を發見することです。「ねえ、いふだらう、こゝん所が、ね」「うん」「描いて御覽」「うん」。これで萬事が解決するんです。

教育學で説く「教材」さいふのは、實はかうして互ひに通ひ合ふ氣持の事なんです。繪の方の教材さいふのは、題材又は畫題のことで、子供と親又は先生が共同して作り出した美の社會さいふ事なんです。それを血のめぐりの悪い一般の教育學者は、この尊い教材の説き方を全く誤つて、「世間で考へるモデル」にして、即ち「ゼロ」にして解釋してゐるから、實に困つたものなんです。一般の圖書教育學者や圖書教育者は、畫題が心境の繪を離れて、植物學的の林檎として向うに用器畫法的に見えてゐるさ言ふ風に信じてゐるらしいんです。こんな人達は、美を抜きにした世界の住民です。朝比奈だつてガリヴァーだつて、こんな珍らしい島を知らなかつたでせう。これでは、そんな事をしたつて、繪の解る筈もなし、又そんな事をしたつて、繪の指導なきの出來るわけがありません。考へて見るに、實に恐ろしい事です。

(昭和十年七月二十五日講演)